

令和7年度
普及活動成果集

技術力と地域力で
未来にチャレンジする南筑後の農業



令和8年3月
福岡県筑後農林事務所南筑後普及指導センター

目 次

	ページ
はじめに	1
Ⅰ 普及活動の主な成果	
1 担い手の確保・育成による南筑後地域農業の活性化	2
2 水田および園芸農業担い手の経営力強化による大川・大木地域農業振興	4
3 地域を担う女性農業者の育成	6
4 米・麦・大豆の収量・品質の高位安定による水田農業の経営改善	7
5 スマート農業技術のレベルアップによるナスの生産性向上	8
6 トマトの新品種に適応した栽培技術による収量向上	9
7 落葉果樹の安定生産と新品種の普及による産地振興支援	10
8 トルコギキョウと草花の生産振興	11
9 牛冷却システム導入による繁殖性向上支援	12
Ⅱ トピックス	
1 令和7年度（第64回）農林水産祭にて徳永順子氏（みやま市）が内閣総理大臣賞を受賞	13
2 第48回筑後地区冬春なす指定産地協議会立毛品評会	13
3 花あふれるふくおか推進協議会主催の福岡県花き品評会「産物の部」で龍農園（大川市）が福岡県知事賞を受賞	14
4 第61回福岡県肉畜共進会の和牛の部で豊作ファーム（株）が銀賞を受賞	14
5 イチゴ炭疽病防除のための雨よけ育苗推進	15
Ⅲ 令和7年の気象概況と対応	
1 気象概況	16
2 主な気象と対応	17
Ⅳ 令和7年度現地活動情報及び主な展示ほ成果の概要	
1 現地活動情報	18
2 主な展示ほ成果の概要	19
Ⅴ 普及指導センター活動体制	
	20

はじめに

令和7年の夏はこれまでに経験したことがない記録的な猛暑となり、7月は少雨となりました。この気象環境は管内で栽培されている作物全般に影響を及ぼし、特に水稻やアスパラガス、ブドウの品質低下や減収を招きました。このため、農作物や家畜の管理はもちろん、農作業時の高温対策がこれまで以上に重要となっています。

また、令和6年から7年にかけては、各地で米の買い占めと品薄が発生し、米の価格が全国的に高騰した、いわゆる「令和の米騒動」が起きました。

普及指導センターとしては、農業者の不安や現場の声を汲み取り、地域農業の振興と農業経営の安定のために、今後とも役割を自覚し、期待に応えていかなければなりません。

一方、2025年農林業センサスによれば、個人経営体の基幹的農業従事者は102万1千人で、5年前に比べ25%減少するとともに、65歳以上は全体の約70%を占めています。このような後継者や労働力不足は、南筑後の農業地帯においても大きな課題となっています。

このため、普及指導センターでは、関係機関・団体との連携のもと、新規就農者の育成はもとより、産地における雇用労働力の活用やスマート農業技術の導入・普及に取り組んで参りました。

本紙では、本年度の活動で得られた成果や進捗状況を紹介するとともに、長年の農業生産等の取組により各種表彰を受けられた農業者の方々をトピックスで紹介しています。

まだ取組み過程にある課題も多くありますが、生産や経営改善の手法や地域農業の振興方策策定の一助となれば幸いです。

これからも、地域の関係機関、団体との連携をはじめ、指導農業士や青年農業士、女性農村アドバイザー、地域のリーダーの皆様との連携を図りながら、地域の課題解決を進めてまいります。

令和8年3月

筑後農林事務所南筑後普及指導センター長

綾戸 保

I 普及活動の主な成果

[1] 担い手の確保・育成による南筑後地域農業の活性化

1 課題化の背景

J Aみなみ筑後地域は、平坦部では米・麦・大豆と併せて、ナスやイチゴなどの施設園芸が、中山間地域ではカンキツ等の果樹園芸が盛んな地域であるが、担い手の高齢化に伴い産地の縮小が懸念されている。

そこで、主力品目であるカンキツについては、J A柑橘部会の部会役員や青年部役員、関係機関が一体となり「MAP会議（みかん活性化プロジェクト）」を立ち上げ、新規就農者を受入れるための体制整備を進めてきた。また、ナスとイチゴについてはみやま・大牟田地域新規就農支援協議会が運営する就農希望者のための研修機関「トレーニングファーム」を継続的に支援した。

また、水田農業の多くを担っている集落営農法人においては、設立から10年以上が経過し構成員の高齢化により運営が困難になりつつある。そこで、関係機関の組織支援担当者で構成する「担い手WG会議」の活動を中心として、法人役員会への参画や直営農地の運営提案など、個別支援を進めた。

2 活動内容

(1) 新規就農者の確保によるカンキツ及び園芸産地の活性化

みやま市、大牟田市でカンキツでの就農を検討している人を対象に、みかんの作業体験会を6月と11月の2回実施した（写真1）。参加者には、カンキツ農家との交流会や年間の栽培管理概要、集出荷施設や生産部会体制の説明を行い具体的なカンキツでの就農イメージを伝えることができた。その結果、就農に向けた次段階の研修である「週末通農」への参加者2名を確保することができた。



写真1 みかん作業体験会

(2) 集落営農法人の経営力強化による持続性のある水田農業の構築

担い手WG会議にて、今までの聞き取り内容を元に、支援対象法人を5つに設定し、法人間連携や雇用導入などに向けたコンサルテーションを行い、組織運営への提案を行った。

省力技術である乾田直播導入の意向のある法人に対して、展示ほを設置し（写真2）新薬剤の効果確認を含め技術導入に向けた理解を進めた。



写真2 乾田直播の展示ほ 防除の様子

3 主な成果

(1) 新規就農者の確保によるカンキツ及び園芸産地の活性化

カンキツにおいてMAP会議活動や産地構造改革計画に係るアンケートの活用等により、貸付意向のある園地の情報を、関係機関共有の資料として取りまとめた。

また、新規就農支援協議会（写真3）において、JA管内の空きハウスの情報を取りまとめ、JA内に掲示することで共有した（写真4）。

就農希望者向け研修制度の第2段階である「週末通農」の検討を進め、これをJA柑橘部会として令和8年2月から取り組みを開始することや、トレーナー体制としてベテラン農家と若手農家でチームとすることなどを決定し、実施に向けた支援を行っている。

新規就農者数は、相談会の開催等により、資材高騰などで資金面の確保が厳しいなか、5名（イチゴ3名、ナス2名）が新たに就農に至った。



写真3 新規就農支援協議会

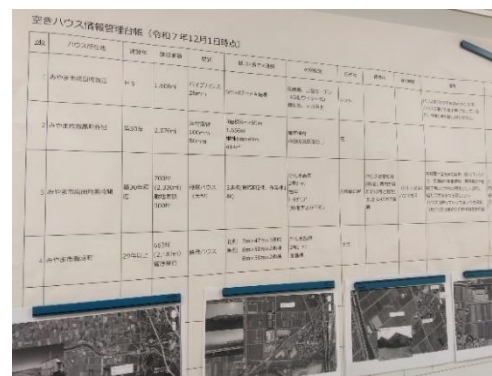


写真4 JA内の空きハウス情報の掲示

(2) 集落営農法人の経営力強化による持続性のある水田農業の構築

関係機関と協力し、法人間連携について、継続的に支援を進めた結果、高柳地区の3法人が令和8年4月に合併することが決定した。現在、合併後の安定的な運営に向け、財産管理や機械利用料の設定等の協議を支援している。

省力技術導入法人については、水稻作での省力化を支援した結果、新たに1法人が乾田直播の導入に至り、累計4法人となった（写真5）。このことにより、労働力不足の緩和が可能となるとともに、今後は経営規模の拡大や組織運営の安定化が期待される。



写真5 法人による水稻乾田直播作業

〔2〕 水田および園芸農業担い手の経営力強化による 大川・大木地域農業振興

1 課題化の背景

大川市・大木町の基幹農業である水田及び園芸では、担い手育成による経営力強化が重要な目標となっている。

水田農業の主要な担い手である集落営農法人が抱える重要課題のひとつとして、構成員の高齢化・オペレーター（以下、OP）不足が挙げられる。そのため、集落営農法人の経営力強化を目指した改善計画の実践やOP型法人の育成を進めるとともに、法人間連携に向けた取組を支援した。

園芸農業では、主要品目のイチゴ・アスパラガス産地の維持のため、個別の規模拡大を進める必要がある。また、雇用型のイチゴ経営では、作業が少ない夏季に雇用を維持するための補完品目の導入が課題となっている。そこで、園芸農家の規模拡大と補完品目の導入支援に取り組んだ。

2 活動内容

（1）水田農業の担い手の経営力強化

○集落営農法人の経営力強化

経営力強化のために「ロードマップ（15年プラン）」を作成した9法人に対して、計画の進捗確認や課題の見直しなどを行う実践支援に取り組んだ。「ロードマップ」とは、法人自らが抽出した課題を整理し、その解決を図るために立てた目標達成に向けた行動計画である。各法人の状況に応じて、短期目標に向けた具体的な行動を引き出すための実践支援を複数回行った。各支援は、対象法人ごとに支援チームを編成し関係機関が連携して当たった。また、昨年に引き続き、若手OPへの技術力向上対策とした水稻基礎講座を開催した。



写真1 ロードマップ実践支援の様子

○法人間連携の実質稼働

大川市の2地区において、昨年度から法人等間連携の協議を始め、本年度はさらに具体的に協議を深めた。地域のブロックローテーションの適正運営を目指したA地区では法人と個別大規模生産者間での農地運営協議を、機械・OP不足課題を持つB地区では5法人が防除作業に関する連携協議を進めている。

関係機関で支援チーム会議を設置し、定期的な協議・情報交換を行う体制を新たに整えた。

（２）園芸農業の担い手の経営力強化

○規模拡大志向農家への支援

令和 7 年度に規模拡大を志向するイチゴ農家 7 戸、アスパラガス農家 1 戸に対して、規模拡大に向けた支援として補助事業の活用や空きハウス情報など個々のニーズに合致した支援を行った。

○補完品目導入による経営改善支援

令和 7 年度に補完品目のケイトウやブドウを栽培したイチゴ農家やアスパラガス農家に対して、ケイトウの栽培・販売支援やブドウの植え付け前に栽培技術に関する情報を提供した。また、新規に栽培を始めた生産者のために販路の確保について J A と検討した。次年度以降、新規に補完品目の導入を検討している農家に対しては、作型や作業時間のシミュレーションなどにより導入に向けて支援した。



写真 2
出荷前のケイトウの様子
(補完品目導入)

3 主な成果

（１）水田農業の担い手の経営力強化

○集落営農法人の経営力強化

「ロードマップ」の進捗状況確認と計画の見直しを行う実践支援を通して、2 法人（大川市 1 法人、大木町 1 法人）が、ロードマップの短期目標を達成した。目標に向けた課題解決のための支援として提案した現地技術試験や、国・県事業を活用しての専門家による勉強会などに取り組むことで、課題解決が図られた。

○法人間連携の実質稼働

大川市の 2 地区、大木町の 1 地区での法人間連携稼働に向けた協議を進める一方、両市町の法人代表者会での承認を受け、将来の法人間連携を見据えた法人運営情報収集が始まった。また、両市町で関係機関による「法人支援チーム会議」が設置され、定期的な会議開催による情報共有・検討を行う体制が整った。

（２）園芸農業の担い手の経営力強化

○園芸農家の規模拡大

令和 7 年度には、3 戸のイチゴ農家が令和 6 年に比べて 3 a 以上面積を拡大した。

○補完品目の導入による園芸農家の経営改善

雇用型経営のイチゴ農家 1 戸が補完品目としてケイトウを栽培・販売し、「イチゴの作業が少ない夏季における雇用を安定させる」という目標を達成した。

〔3〕 地域を担う女性農業者の育成

1 課題化の背景

女性農業者は農業就業人口の約半数を占めるものの、自己研鑽を行う機会は少なく、役員等組織の意思決定や、自家の経営へ参画する方は少ない。そのため、女性農業者のリーダー育成に向けた各種研修会の開催や、経営改善計画の策定に資する支援を行い、女性が経営に参画する意欲の向上を図った。

2 活動内容

（１）女性農業者のリーダー育成

女性農村アドバイザーを各年度の当初に参集し、当年の活動計画等を自主的に意思決定できるよう誘導した。検討時には、過去の視察先や研修の実績・提案についても紹介し、アドバイザー自身で意思決定ができるよう工夫した。

研修は、ブランド化など売り方の工夫に関する販売面の講演、病虫害の農薬抵抗性など栽培面の基礎知識に関する講演や、表現力・感受性を高めるための北原白秋の詩に関する文化的な講演など、年度毎に内容を変えて実施した（写真１）。

（２）経営改善計画の策定等支援

管内の主要品目を栽培する女性農業者を対象に、経営に関する様々な取組を行った。具体的には、農業経営改善計画の概要の講習や、外国人技能実習生を活用している女性農業者からの講話、将来の経営目標を策定するキャリアプラン作成講座など年度毎に対象者や内容を変えた支援を行った（写真２）。

3 主な成果

女性の経営参画を進めるため、女性農村アドバイザー等リーダー育成を通じた資質向上の取組や、経営改善計画の策定等支援に取り組んだ。その結果、令和５～７年で計１３名の新規女性認定農業者（共同申請含む）が育成された。



写真１ 農薬の基礎知識に関する講演会



写真２ 外国人を雇用する農業者からの講話

[4] 米・麦・大豆の収量・品質の高位安定による

水田農業の経営改善

1 課題化の背景

当普及指導センター管内は、県下でも随一の米・麦・大豆生産地だが、近年、収量や品質が不安定であり、農家の経営に影響を及ぼしている。

そこで、新技術の普及や新品種栽培体系確立の推進に加え、既存の技術を徹底周知することで、米・麦・大豆の収量および品質の向上を図った。

2 活動内容

(1) 大豆の収量向上

管内の各 J A にて講習会や栽培情報による周知を実施し、適期播種とカメムシ対策などの徹底を促した。さらに、アサガオ類やツユクサ類の難防除雑草対策の実演を兼ねた試験（写真 1）を実施した。

(2) 水稻の一等米比率向上

新品種導入に向けた現地試験を管内 3 ほ場で実施した。また、薬剤抵抗性を有したコブノメイガに対する箱処理剤の効果比較試験を行った。

(3) 麦類の収量・品質安定

「ちくし春香」導入に向けた現地試験を実施した。さらに、病害防除や穂揃期追肥の徹底など基本技術を励行する営農情報を複数回発信した。

3 主な成果

(1) 大豆の収量向上

講習会や栽培情報の提供によって、概ね適期内で播種を終了することができ、カメムシ防除も徹底された。収量は概ね 180kg/10a と見込まれている（図 1）。

(2) 水稻の一等米比率向上

薬剤効果試験の結果について、管内の各 J A と共有し、防除こよみに反映できた。

(3) 麦類の収量・品質安定

令和 6 年産の収量低下要因となったコムギ黄斑病対策に加えて、栽培管理徹底の発信をした結果、収量は 450kg/10a となり、目標を達成した。



写真 1 大豆の難防除雑草対策の実演会

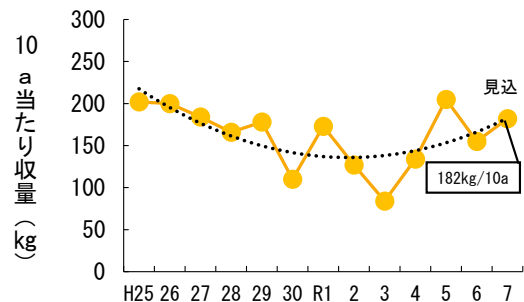


図 1 過去 13 年間の大豆収量の推移

[5] スマート農業技術のレベルアップによるナスの生産性向上

1 課題化の背景

南筑後地域の促成ナス栽培では、環境測定装置を活用した環境制御技術の導入が進んでおり、これらを効率的に活用した生産性向上に取り組んでいる。一方で、近年の資源価格高騰及びCO₂排出削減対策として、CO₂局所施用技術などによる省エネ技術の導入が期待されている。そこで、スマート農業を活用した環境制御によるナスの省エネ技術の普及を進め、更なる生産性向上に取り組んだ。

2 活動内容

(1) スマート農業の推進

スマート農業取組農業者（83 戸）を対象に研修会及び個別相談会を開催し、個別の技術分析や課題整理を行い、ICTを活用した生産性向上を支援した。また、未導入の生産者に対しても環境制御技術の試験的導入などにより、データを活用した環境制御の有益性を情報提供した。

(2) 低コスト栽培の技術実証ほ

促成ナス栽培におけるCO₂施用は、ハウス換気時の流出によるロスが課題となっている。そこで、換気部の開閉と連動するCO₂施用技術および局所施用を導入した実証ほを設置し、省エネかつ効率的な生産性向上効果を検証した（写真1）。



写真1 換気部の開閉と連動するCO₂施用技術
および局所施用

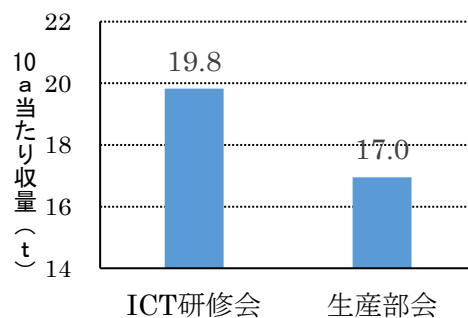


図1 なす JA みなみ筑後 ICT 研究会員
および生産部会員のR6年産平均収量

3 主な成果

(1) スマート農業の推進

環境測定装置導入者は令和4年産の67名から令和7年産には83名に増加した。また、令和6年産の平均収量はJAみなみ筑後ICT研究会員では19.8 t/10aとなり、部会員平均と比べて16%増収した（図1）。

(2) 低コスト栽培の推進

低コスト栽培の技術実証ほの設置や低コスト栽培技術について情報提供したことで令和7年の省エネ技術・省施肥栽培体系導入農業者数は89戸となった。

[6] トマトの新品種に適応した栽培技術による収量向上

～ 草勢診断や体内窒素測定により栽培技術の改善を支援 ～

1 課題化の背景

J A柳川トマト部会は、令和6年度に品種を「TYプリマドンナ」に切り替えた。本品種はそれまで県内のトマト産地で栽培された例がなく、品種特性等に関する情報が不足していた。そこで、令和5年度に設置した品種展示ほの結果や種苗メーカーからの情報に基づいて品種特性および栽培上の注意点を情報提供し、品種に適応した栽培技術を普及する必要があった。

2 活動内容

(1) 展示ほ設置による新品種の特性把握（令和5年度）

令和5年度に設置した品種比較展示ほにおいて「TYプリマドンナ」の品種特性を調査した。本品種は、果形や果実の大きさの揃いは良好であるが、生育後半には草勢が低下しやすいことが明らかとなった。このことに基づき、本品種の栽培は生育後半まで草勢が維持されるような栽培管理が必要であることを情報提供した。

(2) 草勢診断や体内窒素診断による栽培管理改善支援（令和6～7年度）

農家が、草勢や肥効を数値で把握し、生育に応じた適切な温度管理や肥培管理ができることが必要である。このため、草勢をスコア化したり（写真



草勢2



草勢3



草勢4

写真1 草勢のスコア化



写真2 体内窒素濃度の測定

1)、体内の窒素（硝酸イオン）濃度を測定し（写真2）、それに基づき栽培管理の改善を助言した。

(3) 種苗メーカーやJ Aと連携した現地巡回指導（令和6～7年度）

品種特性や同品種を栽培している他県の産地の取り組み等の幅広い情報を迅速に伝えるため、種苗メーカーやJ Aと連携して巡回指導を実施した。

3 主な成果

収量の向上

J A柳川トマト部会における令和6年産(R6. 12～R7. 6 出荷)の収量は、17.85 t/10aで、前々年度および前年度に比べて約0.8～1.7 t/10a増加した。また、10a当たりの収量が18 t以上の農家は部会全体の60%と、前々年度および前年度に比べて高くなった（図1）。

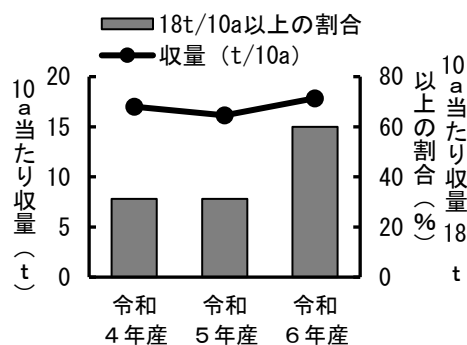


図1 収量の推移

[7] 落葉果樹の安定生産と新品種の普及による産地振興支援

1 課題化の背景

管内のスモモは、令和元年度に 275 t の出荷量を記録したが、その後 200 t 未満と低迷していた為、結実安定対策の普及を重点に進めてきた。

また、キウイフルーツは、従来品種「ヘイワード」よりも出荷時期が早く、県育成品種である黄色系キウイフルーツ「甘うい」の導入と栽培技術の確立を進めてきた。

2 活動内容

(1) スモモの結実安定対策を推進

スモモの開花期の3月中下旬は年間で気温の乱高下が一番大きく、天候不順の影響が大きい為、挿し枝の実施など受粉対策に重点を置き、結実安定に取り組んだ。

(2) キウイフルーツ「甘うい」の収量向上

「甘うい」は、従来品種と異なる結実管理が必要であるだけでなく、枝葉が過繁茂となりやすく、そのままにしておくと落葉し、品質・収量低下につながるため、夏場の枝管理が特に重要となる。そのため、関係機関と協力して「甘うい」の夏期管理講習会や園地評価会を実施し、樹の適正管理を呼びかけた。

3 主な成果

(1) スモモの減収は対策不足の可能性が大きい

出荷量は開花期の天候不順のため平成4年以来の33年振りの大凶作となったが、適正な受粉対策をした生産者は平年並みの収量を確保している割合が高い事が判明した。特に、受粉樹としてハリウッドを利用していると平年並みの収量を達成した割合が高かった(図1、2)。



図1 結実効果の高い挿し枝

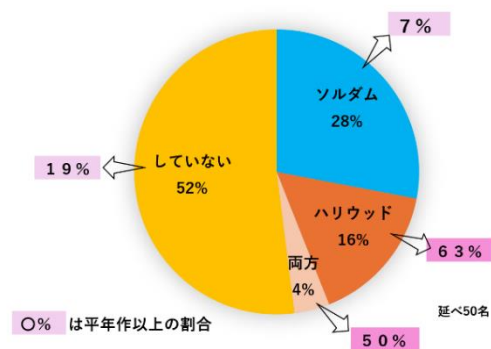


図2 挿し枝の種類と平年作以上の割合

(2) 「甘うい」の収量が過去最高

適正着果量の順守や夏場の枝管理、水分管理等の徹底を促した結果、「甘うい」の収量が過去最高の112tとなり、初めて100tを突破した(図3)。

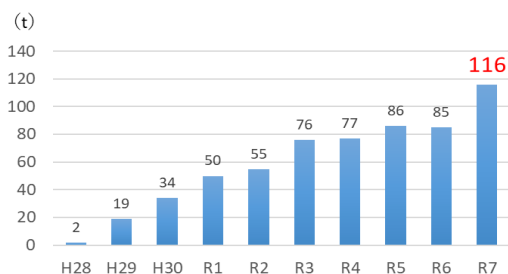


図3 「甘うい」生産量の推移

[8] トルコギキョウと草花の生産振興

1 課題化の背景

南筑後地域では花き生産者の減少に伴う産地の縮小が懸念されている。そこで、他品目の生産者に安定的に高収益を得ることが期待されるトルコギキョウの導入を推進するとともに、出荷量向上に向けた作付け拡大や適期管理の推進に取り組んだ。さらに、経営の安定強化を図るため、補完品目として有望な草花の作付けの推進および栽培技術確立を支援した。

2 活動内容

(1) トルコギキョウの作付け推進および出荷量向上

労力的に余裕のある夏季に出荷できる品目を希望する生産者に対して季咲の作型を推進した。収益性の高い秋作についても、作型の拡大を推進した。また、労働力に見合った作付け計画の作成支援や、こまめな現地巡回を通じて適期管理の実践を支援した。

(2) 草花の作付け推進および栽培技術確立支援

トルコギキョウとの組み合わせとしてブプレウラム・ケイトウの新規作付けを推進した。関係機関や既存生産者と連携して現地巡回を行いながら、水管理・追肥の量やタイミング、病虫害防除、出荷調整方法などのポイントについて適宜確認した。さらに、市場と連携し、選別についても情報交換を行い、高品質安定出荷に取り組んだ（写真1）。

3 主な成果

(1) トルコギキョウの出荷量が向上

季咲の作型は新たに3名が作付けを行い、秋作の作型は3名が規模拡大し、作付面積が増加した。灌水管理の改善や計画的な出荷により出荷量が向上した（図1）。

(2) 草花の作付面積が増加

ブプレウラム・ケイトウで作付面積が新たに13a増加した。栽培技術確立支援により、計画通り需要期に出荷することができた。

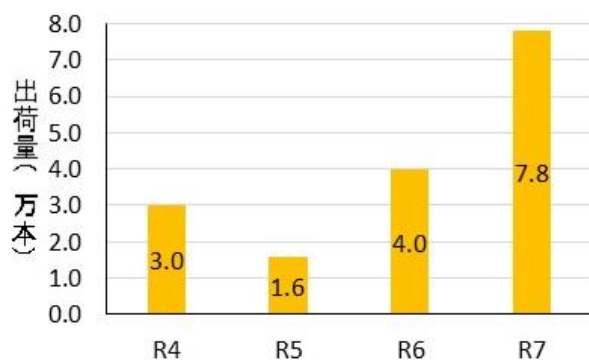


図1 トルコギキョウの出荷量



写真1 先輩農家によるブプレウラムの出荷調整指導

[9] 牛冷却システム導入による繁殖性向上支援

～安定経営への道は快適な牛舎から～

1 課題化の背景

気候変動により、最高気温が 30℃を超える真夏日が5月から11月まで長期間継続している。既存の暑熱対策である牛を濡らす細霧冷房では牛床の濡れにより衛生状態が悪化し、牛の生産性や繁殖成績が低下することから暑熱ストレスの緩和が困難になってきた。このため、濡れない霧（ミスト）で牛舎全体を冷却するシステムを推進したところ、繁殖農家一戸が導入したため導入効果を調査した。

2 活動内容

（1）研修会等の実施

既存の暑熱対策は、牛体を濡らして冷やすが牛床も濡れることで雑菌の増殖や湿度の上昇が危惧されている。推進しているシステムは霧の粒子が細かいため、牛の体温が上がる前に牛舎全体を冷やすことで暑熱ストレスを未然に防ぐことができる。導入を推進するため畜産農家や市町担当者に対し研修会の開催や、導入を検討している牛舎にて実演会を実施した（写真1）。

（2）栄養度の評価と粗飼料分析による飼料給与指導

研修会に参加した繁殖農家が5月にシステムを導入した。導入効果を確認するため定期的に牛体の栄養度を測定するとともに、飼料中の栄養に過不足がないよう粗飼料中の栄養を評価し飼養管理について支援した（写真2）。

3 主な成果

7月から12月まで分娩前後の牛体の栄養度を調査した。脂肪蓄積が顕著な6部位を定期的に測定したが、大きな変化は見られず、夏場に栄養度は低下しなかった。今後、受胎率や分娩間隔などの繁殖成績を集計して年度比較する予定である。今後も調査を継続し、導入メリットや費用対効果を取りまとめ、システムの導入を推進する。



写真1 牛舎での実演会

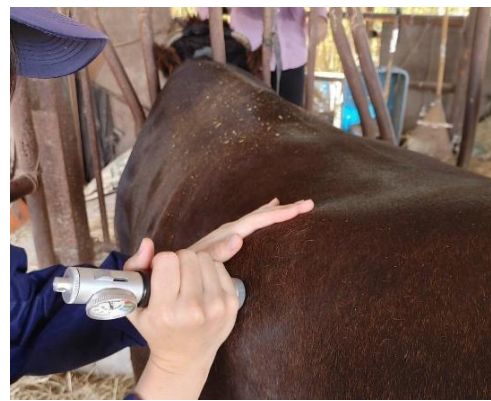


写真2 牛体の栄養度の測定

Ⅱ トピックス

〔1〕 令和7年度（第64回）農林水産祭にて 徳永順子氏（みやま市）が内閣総理大臣賞を受賞

令和7年11月23日、東京都内で開催された令和7年度（第64回）農林水産祭にて、みやま市の徳永順子氏が内閣総理大臣賞を受賞されました。この賞は、農林水産業の発展や地域振興に顕著な功績を残した個人や団体に授与されるものです。

徳永氏は昭和56年に就農し、農業委員会会長をはじめとする様々な役職を務めながら、地域の課題解決に取り組んできました。平成14年からは耕作放棄地の解消を進め、これまでに11.4haの農地を再生しました。また、地域ブランド「山川みかん」の産地発展を目指し、約60haの区画整理を実現し、新たな農業者を迎え入れることで地域農業の持続可能性を高めています。

さらに、資源循環型のまちづくりにも力を注ぎ、バイオマスセンターで生成される液肥を活用した農業を推進しました。併設された食品加工施設やカフェでは、女性の雇用創出や起業支援を行い、地域振興に貢献しています。徳永氏の活動は、地域の人々とともに課題を解決する姿勢が一貫しており、今回の受賞はその成果が広く認められたものです。



徳永順子氏

〔2〕 第48回筑後地区冬春なす指定産地協議会立毛品評会

令和7年10月3日に開催された第48回筑後地区冬春なす指定産地協議会立毛品評会において、JAみなみ筑後の古賀武氏が最優秀賞の知事賞、JAみなみ筑後の内野稔大氏が筑後農林事務所長賞、JAみなみ筑後の田中敏治氏が冬春なす指定産地協議会長賞を受賞されました。

本品評会は、各産地から推薦された生産者の栽培期間中の栽培管理面と期間をとおした全収量、品質面を博多なす技術者協議会が評価し、生産者の技術力を表彰しています。

県内各産地のトップレベルの生産者の中で実施された本品評会で、南筑後地域の生産者の技術力が高く評価されたことは、今後も地域のナス生産者の手本として地域農業の振興に資することが期待されています。



古賀武氏

[3] 花あふれるふくおか推進協議会主催の福岡県花き品評会 「産物の部」で龍農園（大川市）が福岡県知事賞を受賞

令和7年11月28日に開催された令和7年福岡県花き品評会「産物の部」において、龍農園（大川市）のシクラメン「ロマネパープル」が福岡県知事賞を受賞されました。

受賞したシクラメン「ロマネパープル」は、鮮やかなピンクの細かいフリンジの入った花卉で、弁先に向かって白くなる覆輪咲が特徴です。

夏季の高温の影響により、開花遅延やボリューム確保が難しい中、龍農園の出品物は葉数が多く、ボリュームがあることなどが高く評価されました。葉組み、肥培・水管理など龍氏の技術レベルの高さが受賞につながりました。



龍一嘉氏と受賞したシクラメン

[4] 第61回福岡県肉畜共進会の和牛の部で 豊作ファーム(株)が銀賞を受賞

令和7年10月2日に開催された第61回福岡県肉畜共進会「和牛の部」において、豊作ファーム(株)（柳川市、代表：江口豊作氏）が銀賞（JA福岡信連代表理事長賞）を受賞されました。

和牛の部は、30か月未満の牛が出品される部で、今回は67頭の出品がありました。江口氏が出品された和牛は、枝肉重量が543.6kg、ロース芯面積が77cm²、脂肪交雑の度合いを表すBMSがNo.12で、最高ランクのA5に格付けされた素晴らしい枝肉でした。また、脂肪が入りにくいと言われるモモ肉にまで細かいサシ（霜降り）が入る「モモ抜け」も良く、同氏の技術レベルの高さが評価されました。



江口豊作氏

[5] イチゴ炭疽病防除のための雨よけ育苗推進

炭疽病に対して防除効果の高い雨よけ育苗を推進するために、南筑後普及指導センターは、JA福岡大城や久留米普及指導センターと「イチゴ雨よけ育苗プロジェクト」を作り、連携して以下の活動を行いました。

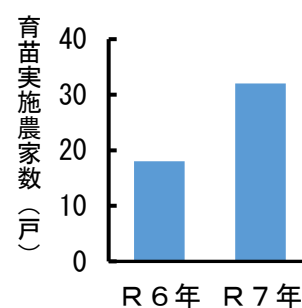
令和6年度に研修会を開催し、雨よけ育苗の効果や要点を情報提供しました。また、実施農家に行った聞き取り調査など等を活用して「イチゴ雨よけ育苗の手引き」を作成しました。

令和7年度は「雨よけ育苗の手引き」を活用して研修会を開催しました。また、前年と同様に聞き取り調査し、防除効果が高い雨よけ育苗技術について検討しました。

活動の結果、令和7年度におけるJA福岡大城の雨よけ育苗実施農家が、前年度から13戸増加し32戸となりました。令和7年度の聞き取り調査では、実施農家の約2/3で、炭疽病の発生が減少し、実施農家のほとんどが「大変良かった・まあ良かった」と評価しました。今後も実施農家の増加が見込まれます。



雨よけ育苗の手引き



雨よけ育苗実施農家

Ⅲ 令和 7 年の気象概況と対応

1 気象概況

令和 7 年の気象の特徴は、次のことが挙げられる（図 1）。

- 1 月～2 月は寒波の影響で平年と比較し気温が低い日が多かった。
（期間平均気温：1 月 平年比 -0.3°C 、2 月 -2.3°C ）
- 5 月 16 日頃に九州北部地方は梅雨入り（平年：6 月 4 日頃）した。
※平年より 19 日早い。
- 6 月 27 日頃に九州北部地方は梅雨明け（平年：7 月 19 日頃）した。
※平年より 22 日早い。
- 6 月～10 月は記録的な高温が持続した。
（期間平均気温：6 月 平年比 $+1.3^{\circ}\text{C}$ 、7 月 $+2.5^{\circ}\text{C}$ 、8 月 $+1.0^{\circ}\text{C}$ 、
9 月 $+2.8^{\circ}\text{C}$ 、10 月 $+2.9^{\circ}\text{C}$ ）

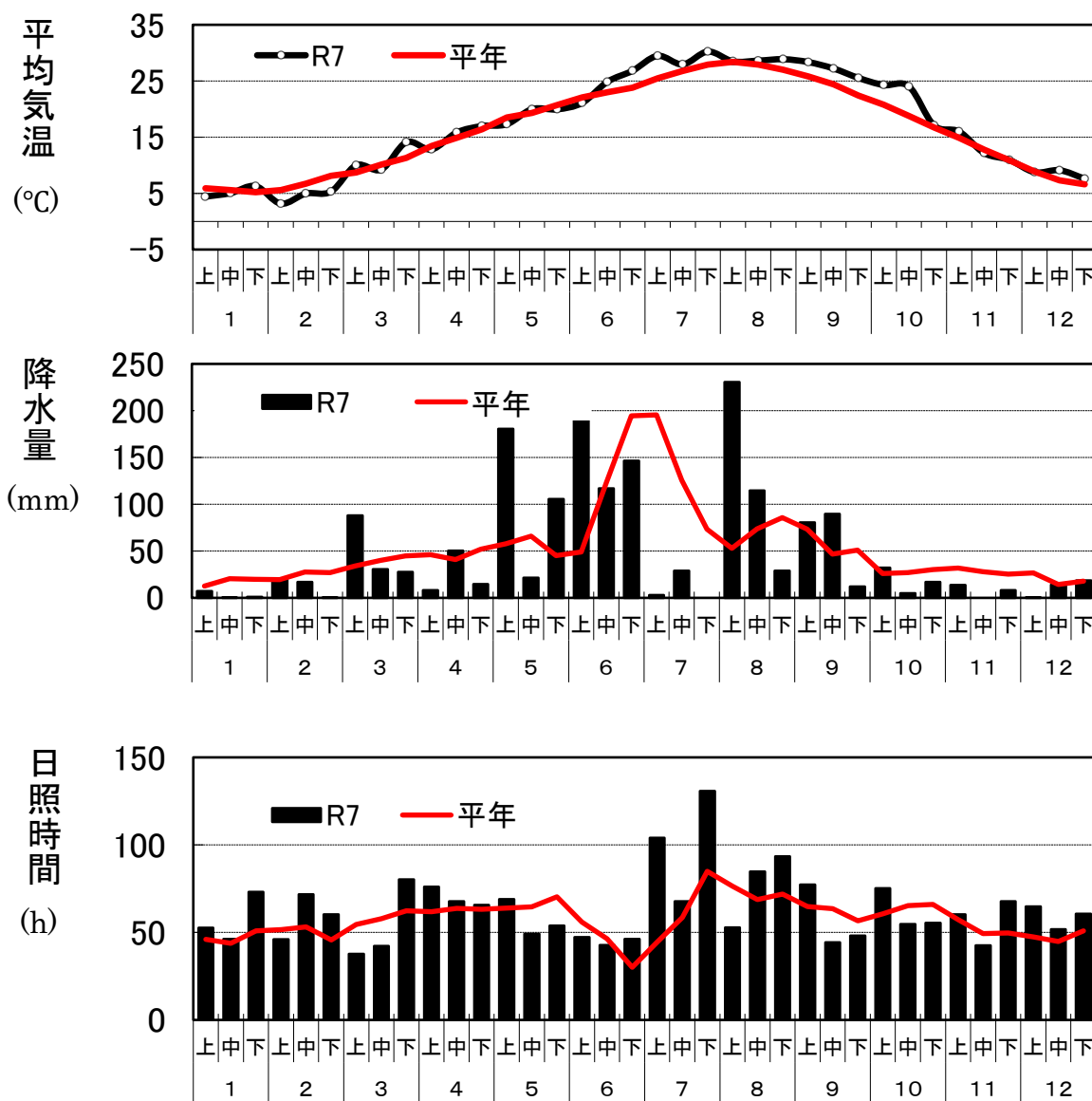


図 1 令和 7 年の旬別平均気温、降水量および日照時間（大牟田市 アメダスデータ）

2 主な気象災害と対応

(1) 3月31日霜害

3月31日（アメダス大牟田 6:00 気温 1.4℃）みやま市山川町で霜害みられ、ミカン、キウイフルーツにおいて展葉芽の枯死がみられた。

(2) 4月14日霰（あられ）

4月14日8時頃（アメダス大牟田 8:00 気温 10.7℃、降水量 0mm、風速 2.2m）みやま市瀬高町と山川町の境で直径約2～5ミリ程度の霰（あられ）が短時間降ったが、被害はなかった。

(3) 5月9日大雨

5月9日（アメダス大牟田 24 時間降水量 116.0mm）の大雨があったが、大きな被害はなかった。

(4) 8月10日、11日大雨

アメダス大牟田 8月10日（アメダス大牟田 24 時間降水量 157.5mm）、8月11日（アメダス大牟田 24 時間降水量 227.5mm）の大雨があったが、大きな被害はなかった。

(5) 普及指導センターが提供した気象災害対策情報

災害被害発生が予想される時には、各品目別に事前対策や早期回復に向けた技術情報を提供した（表1）。

表1 主な気象災害と対応

期 日	情 報 の 内 容
令和7年4月25日	高温に伴う農作物等の技術対策
令和7年6月9日	梅雨期からの大雨・高温を見据えた技術対策、熱中症対策パンフレット、熱中症関係情報集、熱中症対策義務化 周知用リーフレット、参考資料 重油流出事故防止対策パンフレット
令和7年6月10日	梅雨期からの大雨・高温を見据えた技術対策（ほ場・農業用施設の見回りには気象情報を十分に確認）
令和7年7月2日	少雨に伴う農作物等の技術対策
令和7年7月4日	農作業中の熱中症対策の徹底について
令和7年8月1日	長期間の高温に対する農作物等の技術対策
令和7年8月12日	8月9日から11日の大雨後における農作物等に対する技術対策

Ⅳ 令和 7 年度現地活動情報及び主な展示ほ成果の概要

1 現地活動情報

令和 7 年度には、表 1 に示すように 40 タイトルの現地活動情報を発し、福岡県庁のホームページに掲載する他、センター内での掲示や指導農業士、女性農村アドバイザーおよび青年農業士に配布した。

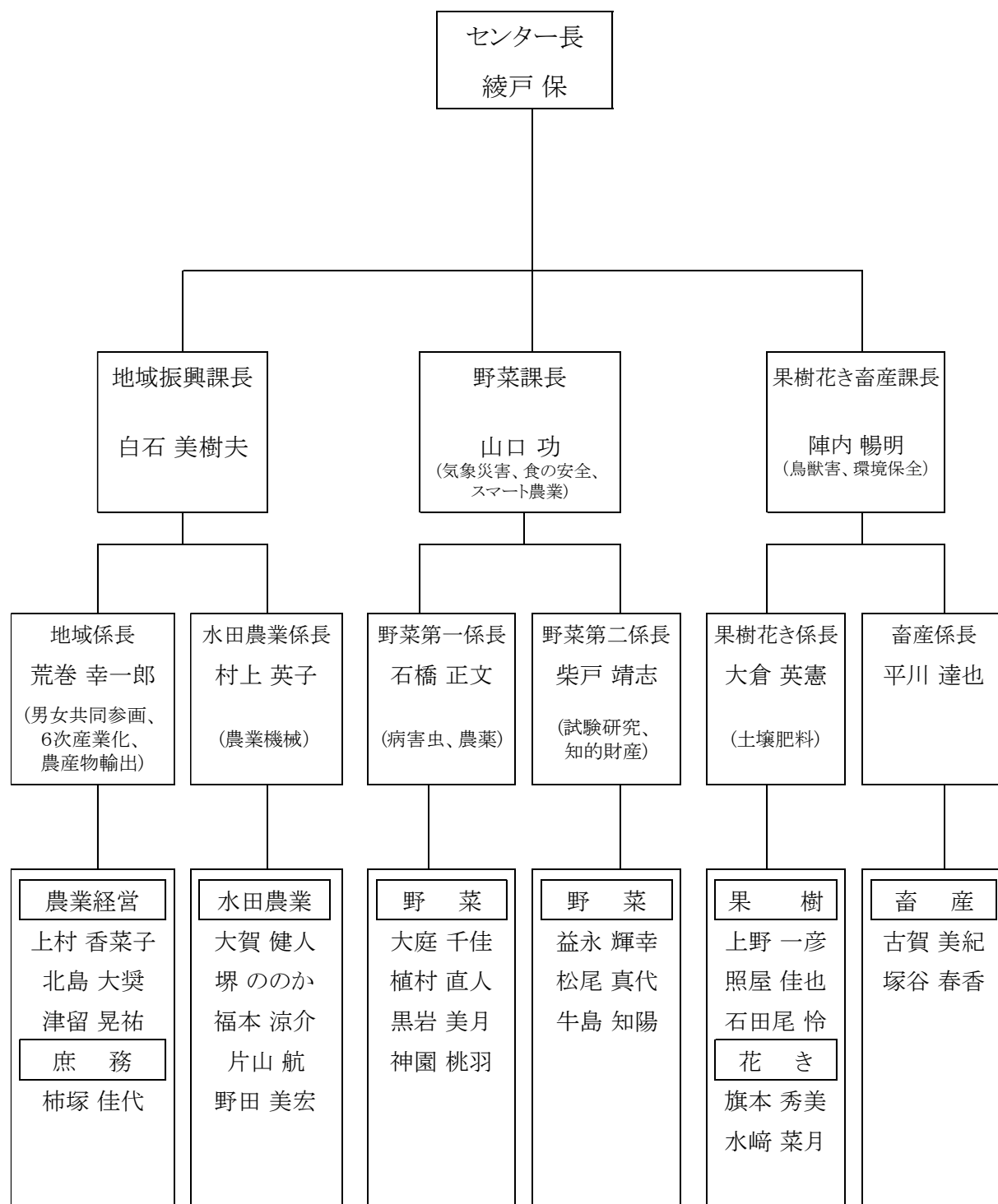
表 1 令和 7 年度に発行した現地活動情報（令和 8 年 2 月末現在）

No	タイトル	No	タイトル
1	JAみなみ筑後麦大豆作生産振興大会を開催	26	令和 7 年度自給飼料研修会を開催
2	米麦大豆の収量・品質向上を目指して	27	みかんの新規就農者確保を目指して！
3	高品質米・大豆の生産に向けて	28	ダリアの環境・生育データに基づく樹勢管理を支援
4	イチゴ雨よけ育苗研修会を開催	29	イチゴ生産環境改善研修会を開催
5	令和 7 年度南筑後地域農業青年クラブ通常総会を開催	30	南筑後地域農業青年アカデミー第3回開催
6	みかん産地の担い手確保を目指して！	31	農薬の適正使用を推進
7	アスパラガス高温対策勉強会を開催	32	令和 7 年度こめこめ研修会を開催－農業気象と鳥獣害対策－
8	なすの生産性の維持・向上に向けて	33	グリーンな栽培体系加速化事業の研修会を開催
9	令和7年度筑後地域畜産研修会を開催	34	和牛繁殖雌牛のさらなる改良をめざして
10	トマト新品種導入で収量UP!	35	肉用子牛生産組織の合同現地検討会を開催
11	トマト害虫防除研修会を開催しました!	36	第2回酪農後継者勉強会を開催
12	ランチミーティングでコンサル	37	中核農家の経営発展を支援しています!
13	農作業の危険性とその回避に向けてできることを!	38	「甘うい」の冬期管理講習会の実施
14	アスパラガスのハダニ対策勉強会を開催	39	アースオーガで「楽々土づくり」!
15	南筑後地域新規就農者研修会を開催	40	イチゴ営農基礎講座を開催しました
16	南筑後地域女性農業者研修会を開催	41	雇用環境整備に向けての勉強を継続中!
17	JA柳川ナス青年部研修会と意見交換会を開催	42	
18	冬春ナスの収量向上に向けて	43	
19	女性農村アドバイザーOB会緑の風総会研修会を開催	44	
20	南筑後筑後ブロック農業青年技術交換大会を開催	45	
21	大豆の難防除雑草を叩く!!	46	
22	初級パソコン簿記講座を開催	47	
23	ケイトウ新規作付け者の安定出荷に向けて	48	
24	キウイフルーツの品質向上を目指して!	49	
25	ロードマップ実践支援を通じた地域農業振興	50	

2 主な展示ほ成果の概要

対象作物	設置場所	課題及び成果概要
水稻	みやま市	夢つくし」の主産地における極早生水稻系統の現地適応性評価 夏期の高温に登熟期の高温障害が深刻化していることから、高温耐性が強い後継品種「102号・105号」の現地適応性を評価した。「夢つくし」と比較して、収量・食味は同程度であったが、整粒歩合・等級は優れていた。
ナス	柳川市 みやま市	促成ナスの養分吸収量に応じた施肥によるコスト削減 促成ナス栽培において、肥料の成分割合を見直し、養分要求量に応じた適正施肥を行うことで、コスト削減の可能性が示唆された。
イチゴ	大木町	イチゴ育苗における遮熱資材の効果検証 光合成に必要な波長の光を透過させる遮熱資材を育苗期間中に被覆することで、花芽分化や生育の影響を調査した。その結果、花芽分化に大きな違いはなかったものの、高温による根傷みが軽減され、長期被覆による徒長は見られなかった。
カンキツ	みやま市	温州みかんにおけるドローン防除体系の検討 管内のみかんは主に傾斜地で栽培されており、手散布による防除作業の負担が大きいため、ドローンを中心とした防除体系を検討した。その結果、散布時間が88%削減され、黒点病・アザミウマ類に対して慣行の手散布と同等以上の防除効果を確認した。
ブプレウラム	みやま市	遮光ネットによる高温対策の検証 9月定植作型において、高温の影響による活着不良や短径開花が発生し、出荷本数の減少が課題であり、遮熱効果のある遮光ネットを展開した。その結果、晴天日の地温の上昇を抑制し、枯死率が低くなり、収穫時の草丈が増加する傾向であった。

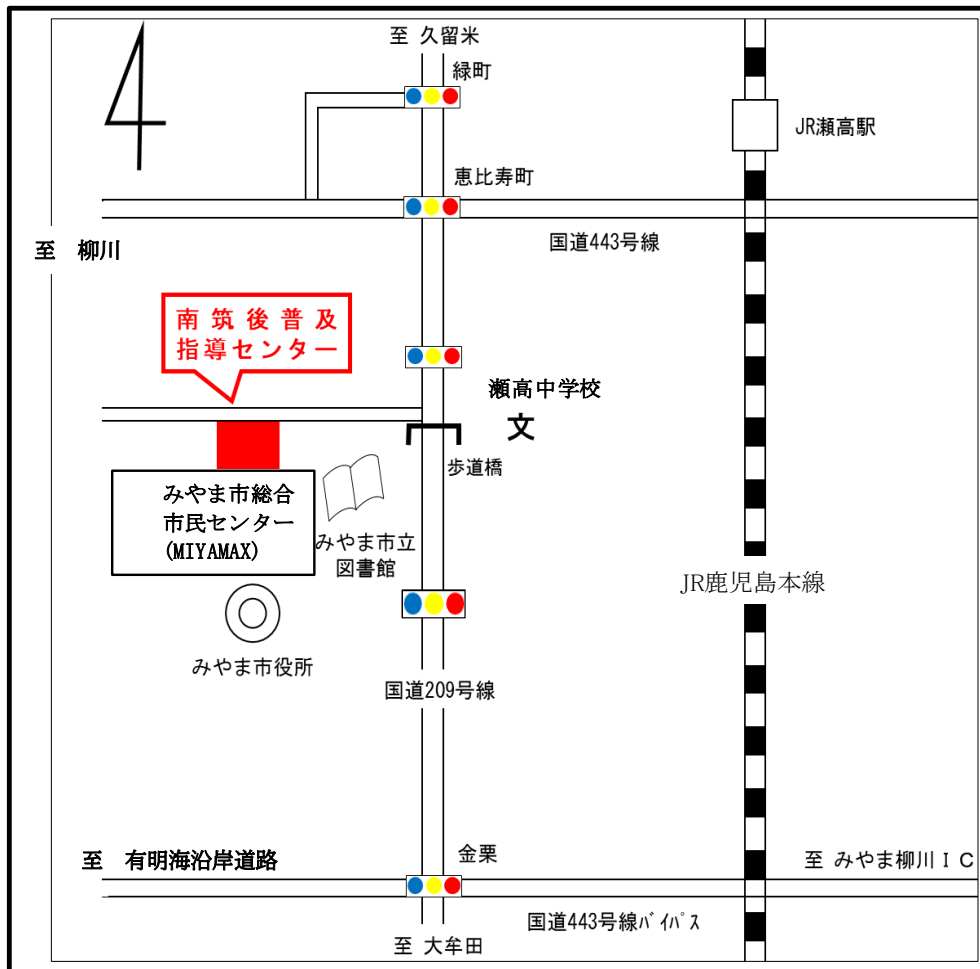
V 普及指導センター活動体制



※ ()は窓口等

※畜産は広域活動

南筑後普及指導センターへのアクセス



福岡県筑後農林事務所
南筑後普及指導センター

〒835-0024
福岡県みやま市瀬高町下庄800-7
TEL:0944-62-4191 FAX:0944-63-4643
E-mail:nanchiku-dlc@pref.fukuoka.lg.jp
URL <https://www.pref.fukuoka.lg.jp/soshiki/4705209/>

高速道路でお越しの方
・九州自動車道「みやま柳川IC」から約3 km

公共交通機関でお越しの方
・JR鹿児島本線「瀬高駅」下車徒歩15分

みやま市総合市民センター（MIYAMAX）

福岡県行政資料	
分類記号 PA	所属コード 4703516
登録年度 07	登録番号 0001